

## The Truth of "the Story of Mahsuri" : An example of Oral Tradition in Malaysia and Thai

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 景子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/00032372">http://hdl.handle.net/10232/00032372</a>

# 「マフスリ伝説」の真実

— マレーシア・タイの Oral Tradition の例 —

黒田 景子

小稿は Oral History を歴史資料収集の方法として扱う試みの模索中に呈示されたひとつの問題である。

## 1. ランカウィー島とマフスリ伝説

ランカウィー (Langkawi) 島はマレーシアのケダー州 (Kedah) の沖合に浮かぶ小島である。島の北の海岸からはタイ領であるタルタオ島が望め、マレーシアのペナン、クアラ・ブルリスの港からの他、タイ領サトゥーン県からも頻繁に小舟が行き交う国境の島である。

この島でマフスリ (Mahsuri) 王女の伝説といえば、「不貞という無実の罪を背負ったまま、非運な最後をとげた王女。処刑のときに流した白い血によって彼女は潔白をあらわし、彼女の呪いが島とケダー王家に7代もの間かかることになった」という悲劇としてよく知られる。1990年以降彼女の墓といわれる場所は整備され、毎日のように観光客が押し寄せる一大観光地となっている。(Malaysia の Homepage の各地域案内にはマフスリの墓 (Mahkam Mahsuri) の写真がランカウィ観光のトップに掲げられている。[<http://www/jaring.my/tdc/ia3-lang.html>]彼女の名前は観光地としてのランカウィーのイメージシンボルとして有名で、辺境の漁村であったランカウィー島は、80年代後半以降のマレーシアの観光開発のシンボリック存在でもある。観光地としては手狭になってきたペナン島から近いこと、またタイのプーケット島に匹敵する景観を目玉として、ゴルフ場やリゾートホテルの建設がいそがれ、その乱開発と利権をめぐる問題などでも有名となっている。

この島への観光客の積極的な誘致は外国人を主な目的とする高級リゾート施設だけではなく、この島に存在するさまざまな遺跡が整備され、観光案内版が立てられたことでも何うことができる。ランカウィーには観光ガイドに載せられる「名所」が多々あり、その主な場所には1989年のマレーシア観光年 (Visit Malaysia Year) を目標として、マレー語、英語、フランス語、日本語の看板がたてられ、遺跡の由来や土地の伝説が書き込まれている。

また、マフスリの物語はその悲劇性から作家にとっての格好の題材ともなり、映画やテレビドラマとして一般のマレーシア人たちにも広く知られることになっている。

しかし、マフスリの物語はもともと Oral Tradition として土地の人々の記憶に留まっていたものであるために、その「伝説」にはさまざまな脚色を加えられ、またこれを文字として留めた者の意図的な記述により、現在では極めて「観光パンフレット用」的な伝説が蔓延している。

たとえば、マレーシアを訪れる英語圏外国人観光客の多くが手にするであろう *Lonely Planet Travel Survival Kit: Malaysia, Singapore & Brunei* には、

「マフスリは不貞の罪により捕えられ、処刑された10世紀のマレーの王女の伝説である。彼

女は最後までその処刑に怒り納得せず、『7代の間、この島の上にはいかなる平和も繁栄もありえないであろう』という呪いをかけた」[119:1994, Lonely Planet Travel Survival Kit: Malaysia, Singapore & Brunei]

とあるが、のちに述べるようにマフスリの物語はほぼ200年前の出来事である。

マレーシアで出版された *Langkawi Guide* [58-60:1991] はマフスリ伝説に2ページをさき、伝説の公的ガイド版とでも言うべきものを提供している。1994年にシンガポールで出版された *Island of Malaysia* [1994] は恐らくはこれを踏まえたのか、「Who was Mahsuri? - myth and history in the Langkawi Islands」    と題して、マフスリ伝説の若干の時代比定を行い、実在の人物であったマフスリは1790年代に20代であったとし、「現実になった」といわれる「マフスリののろい」、これは具体的には18世紀末から顕著になる南タイのシャム地方国ナコンシータマラートに侵入占領された19世紀前半までの時期のケダーの状況をさしているとする。事実、1821年のナコンシータマラートによるケダーの侵入占領の時期を地元ケダーでは Perang Musuh Bisik (ささやく敵の戦い) と呼び、マフスリの伝説はこの時期の記憶と結び付けられているのである。そしてそれはまた、この島における他の Perang Musuh Bisik にかかわる伝説や遺跡と結び付いており、そのことが新たな「観光名所」を提供していることはいうまでもない。

しかし、Oral Tradition として伝えられてきたマフスリの物語には本来「定番」というべきものはない。そして、一般に知られている、そしてもっとも目にしやすい「伝説」はその物語の脚色版であり、それらの「脚色版伝説」群が広く文字資料として知られるようになったことで、むしろ、研究資料としての「伝説」を収集することは、ランカウイーの全島観光化の過程でかなり困難になりつつあり、歴史資料の補助資料として Oral Tradition を収集する研究者にとってきわめて難しい問題となっている。

以下に紹介するのは、そのマフスリの物語を土地の古老から収集した唯一の報告の翻訳である。

この報告をあえて紹介する理由は、インフォーマットと記録者がはっきりしていること。収集された時期が1971年で、ランカウイーの近年の観光化以前のものであること。そして、掲載された雑誌がマレーシア歴史学会 (Persatuan Sejarah Malaysia) のケダー支部 (Cawangan Kedah) とケダー博物館 (Muzium Negeri Kedah) による *Kedah dari Segi Sejarah* (Kedah in History) という、郷土史の雑誌であり、現在ではかなり入手が困難であることからである。

## 2. マフスリ (MAHSURI) : あるケダーの悲劇物語

語り : Ku Jusoh bin Ku Ismail

記録 : Datuk Wan Ibrahim bin Wan Solah

ランカウイーを訪れた事のあるあなたは、ムキム・ウル ムラカ (Mukim Ulu Melaka) にあるマフスリ (Mahsuri) の墓のことを聞いたことがあるにちがいないし、そこを訪れた事があるかも知れない。

マフスリの物語は我々の前の首相、トゥンク・アブデュール・ラーマン・プトラ・アルーハジ (Tunku Abdul Rahman Putra Al-Haj) によって書かれた。それは数年前に映画化され、そして多くの行事のときチャリティとして舞台上で演じられた。

しかしながら、フィルムでそして舞台上で見せられた物語は幾分ランカウイーの古老によって話されていた物語とは異なっている。以下の記述はク・ユソ (Ku Jusoh) という名前の島の古老がわたしに語ったものである。

およそ二百年前のこと、1762年から1800年の間、ケダー (Kedah) を支配していた故スルタン・アブデュラ・ムカラムシャー (Sultan Abdullah Mukarram Shah) 二世の統治時代のことであるが、ランカウイーに貧しいマレー人の夫婦がいた。彼らにはひとり娘がいて、夫の名前はパンダック・マヤ (Pandak Maya)、妻はメ・アングック・アラン (Mek Andak Alang) といった。そして彼らの娘はメ・ヤー (Mek Yah) と呼ばれていた。

ある日夫がいなくなった水牛を捜していた間に、突然激しい雷嵐が来た。パンダック・マヤ (Pandak Maya) は人気がない小屋に難をさけた。ところがその小屋で彼は赤ん坊の泣き声を聞いた。彼は赤ん坊がどこにいるのかあちこちさがしたが、なんの印もなくわからなかった。彼が見付けた唯一の不思議なものは、小屋の床の上に乾いて汚い米、マレー語でいう「kerak nasi」が散らばっていたことであった。彼はその汚い米を少し、調べようと拾い上げた。そうすると驚いたことに、赤ん坊の泣き声が突然やんだのである。

かれがその米を再び捨てたとき、彼は再び泣いている赤ん坊の声をきいた。パンダック・マヤ (Pandak Maya) はその出来事にたいそう仰天した。雨がやむと彼は歩いて帰宅したが、そのときの米をすこし持って来て、妻にそれを見せ、彼女に何が起きたかについて話した。

彼の妻は彼に、昔の言い伝えによれば、このときの赤ん坊の泣き声は米粒の精霊が泣くこえ (マレー語 (Malay) 「maya padi」) だったのだ、といった。メ・アングック (Mek Andak) はこの米をとっておいて、そして彼女が自分用のご飯を料理した時いつも、昼食にも夕食にもそれを混ぜこんだ。そして彼ら3人はいつもそれを食べた。

数カ月の後に、メ・アングック (Mek Andak) は再び妊娠した。

パンダック・マヤ (Pandak Maya) は、一家の収入として稲を植える以外に、しばしば家を遠く離れて森にいき、メランティ (meranti) の樹のダマル (樹液) を集めにいった。ある日ダマルを求めてジャングルの奥地にはいりこんだ彼は、ブランダ・プチャ (Belanga Pechah) と呼ばれていた場所で洞穴を見つけた。洞穴で彼はきのこのように見えたものが洞穴の壁にへばりついているのをみつけた。彼はそれがきのこならば彼の妻が料理するだろうと考えてそれを少し集めた。

帰り道で彼はアウ・ベツ (Ah Pek) という名前の中国人に会った。彼はアウ・ベツに彼が持って来たものをみせて、それが何か尋ねた。アウ・ベツは自分ではわからなかったので、パダン・マシラット (Padang Masirat) に住んでいる彼のボス (頭家) にそれを見せられるように、かけらをつくれるように頼んだ。そのボスもそれが何であるかわからなかったので、彼はそれをペナン (Penang) にもって行って見てもらった。

ボスはペナンから戻った数日後、アウ・ベツと一緒にパンダック・マヤ (Pandak Maya) の家に行き、パンダック・マヤがきのこだと思っていたものは食用になる鳥の巣 (燕の巣) であること。そして、それを見つけるのはたいへん難しく、高価なものだと告げた。パンダック・マヤは、洞穴にそれをたくさん見つけていたので、当然非常に喜んだ。それで彼はでかけて行って、洞穴に行って燕の巣を集めて、そしてボスにペナンで彼の代わりにそれを売るよう頼んだ。ときには彼自身がそれを売るためにでかけてもいった。この売買で得た収入で彼は彼自身と家族のために新しい服や他の物品を買った。彼は村の人々に売るためのものも買った。

しばらくたって、パンダック・マヤが燕の巣を見つけ、そしてついにとても裕福になったと

いうニュースが広まった。

ある日マツト・ユソ (Mat Jusoh) と言う名前のパンダック・マヤの友人が家に来て、どこで燕の巣を見つけたのか場所をおしえてくれないかと頼んだ。単純で欲のないパンダック・マヤは、マツト・ユソをその場所に連れていった。しかし実際にそこに到着する前に突然大きい雷鳴が鳴り、嵐がすさまじい勢いで吹いて、大木が何本も根こそぎになった。それでパンダック・マヤと友人はそれ以上の旅を諦めて、家に帰った。

それからしばらくして彼らはもう一度旅を試みたが、また稲光を伴った激しいどしゃ降りにであって、燕の巣どころか、洞穴さえ見つけられなかったので、彼らは結局手ぶらで家に帰る以外になかったのである。

マツト・ユソと彼の友人たちはパンダック・マヤがその場所を隠そうとして、不誠実だったからだとかれを非難した。

さて、パンダック・マヤの妻の妊娠中に、彼の、バナナや果物や野菜等の作物はよく育ち、彼のニワトリやアヒルの数も多くなった。彼の隣人はキンマの葉と野菜を買うために彼をおとずれるようになった。

そのうち彼の名前は村や地域だけでなく、ランカウィー全体によく知られるようになった。

ある晩、彼の妻が神が彼ら家族に与えためぐみと繁栄への感謝の言葉を述べているときに、彼らは家の近くでむつみあっている蛇 (ular cinta mani) の立てる音を聞いた。パンダック・マヤはすばやく走り出て、蛇を見つけ、二匹とも捕まえた。昔の言い伝えに寄れば、むつみあっている蛇をみつけて、そして食べることができた人たちは成功するという。それで彼らは蛇を殺して料理し、3人で余さず食べた。

1・2カ月の後のある晴れた日のよき時間に、パンダック・マヤの妻は産気づいて、すぐに産婆を呼んだ。産婆は大急ぎでやって来て、すぐにパンダック・マヤに水を手に入れるように頼んだ。しかし干ばつのためにその時彼は近くに十分な水を手に入れることができなかった。助産婦はパンダック・マヤにキンマの葉を取って来るようたのんだけれど、しかし同じく彼はキンマの葉が絡み合っている高さにまで (のぼることが) できなかったので、おなじく手に入れることができなかった。

ほどなく赤ん坊は安全に生まれ、そしてパンダック・マヤは赤ん坊に名前を与えるために産婆に呼び入れられて、赤ん坊にマフスリという名前を与えた。

マフスリが生後1週間の時、パンダック・マヤは自分が近くの池に水浴のために赤ん坊を連れて来なければならないと夢に見た。彼は夢のおつげに従い、水浴の後に赤ん坊は家に連れて来られた。

休みをとりたとき、パンダック・マヤは、森を散歩するのをいつもの習癖としていた。あるとき彼は密林を散歩していて、奇妙な岩をみつけた。彼はそれを調べ、パラシ (山刀) で少しけずりとして、あぶってみるとその煙は強い快い芳香がした。彼はかたまりをすこし集めて、家に持ってかえた。あとでアウ・ペツにそれをみせると、彼はそれが「Kemian」であって、売るのが容易でしかも、よい値がつくことを教えた。パンダック・マヤはもっと多くの Kemian を集めて、そしてアウ・ペツにペナンでそれを売るように頼んだ。

Kemian が今日まで見つかる場所はルボ・クミアン (Lubuk Kemian) である。Kemian を売って得られる収入はパンダック・マヤを財政的にもっと強くした。

マフスリは成長するにしたがい、大変に美しく愛らしくなった。そして多くの人々が家を訪

れ、プレゼントを持って来るようになった。すっかり大人になっても、なお美しく、一層魅力的になって、さらに、貧しい人々にとっても、彼女は目の喜びであり、また心ひかれる存在であった。そのときランカウイ島中で彼女をしのぐような美女はいなかったのである。

この時代、ランカウイは、ダトゥ・スリ・クルマ・ジャヤ (Datuk Seri Kerma Jaya) の称号をもった、スルタンによって任命されたひとりの族長によって支配されていた。そして彼の妻の名前はマフラ (Mahura) であった。このダトゥ (Datuk) はマフスリ (Mahsuri) のことを耳にして、人々が彼女の美と魅力のことを話しているのをきいた時、わざわざマフスリ (Mahsuri) を見るために特別にマワット (Mawat) へでかけていった。

パンダック・マヤの家に到着したダトゥはパンダック・マヤと彼の妻の両方が不在であることに気がついたが、彼らの娘、Mahsuri は家にいた。彼女はドアを開けて、そしてダトゥに彼女の両親は家にいないので、夜遅く帰ってくると告げた。ダトゥは今は待つことができないので、また何か他の日に訪問するだろうと言った。

ダトゥはマフスリの魅力と美に心を打たれ、そして彼女を妻としてめとりたいという想いが起こった。しかし、その事を彼が第一の妻に告げると、激しい言い争いとなり、彼は自分がマフスリと結婚することについては断念せざるを得なかった。

しかしながら、ダトゥにはマット・デリス (Mat Deris) と命名された息子がいて、ダトゥは口論を取り繕った後で、ダトゥが懇願したので、彼の妻はマフスリを息子と結婚させることには同意した。パンダック・マヤと彼の妻は正式に話を持ちかけられ、快くその話をうけた。ほどなく結婚式が大々的におこなわれ、そしてほとんどすべてのランカウイの島の人々はその幸せな行事に招かれた。

結婚後、若い夫婦は平和になかよく暮らし、数カ月が過ぎ去った。そしてマフスリは身籠もった。マット・デリスは仕事でいつものようにシャムへ旅立ち、しばらくの間帰らないことがあった。

マット・デリスの不在の間にランカウイに貧しい若いマレー人の旅人が来た。彼の名前はドゥラマン (Deramang) であった。この男はマラッカ生まれであった。彼はペナンとプルリスを含めた半島中を旅していて、プルリスからしばらくのあいだランカウイに滞在していた。ドゥラマンは非常に素晴らしい声を持ち、そして詩歌を暗唱し、話を語ることが上手であった。ある日彼はマフスリの家に来た。彼女はこの貧しい男に哀れみをかんじて、自分の両親の許しを得て、しばらく家に滞在するよういった。ドゥラマンはその親切な招待を受け入れ、彼女に感謝した。

夜になるとドゥラマンは詩歌を暗唱して、そして物語を語った。近くの村の人々もドゥラマンの語りを聞くためにマフスリの家に来て来た。

数カ月の後にマフスリは彼女の最初の子を出産し、マット・アルス (Mat Arus) の名前が与えられた。ドゥラマンとマフスリのもてなしの良さがますます多くの人々を引きつけ、ダトゥの家を訪問するものは少なかった。マフスリの名前はすべての人のための主婦の名としたいへん有名だったのである。

ダトゥの妻マフラはマフスリの人気をねたましく、うらやましく思った。彼女は夫が以前彼女と結婚しようとしたことを思いだし、そしてそのことが夫との感情のしこりをうむ原因となったことをも覚えていたので、ある陰謀をたくらんだ。

ある暗い夜、彼女はマフスリの家に行き、ドゥラマンが詩歌を暗唱したり、物語を語っているのを聞きたいと言って、夫のダトゥに外出の許可を求めた。ダトゥが彼女に許可を与えた

ので、彼女はでかけていった。しかしほどなく彼女は泣いて家に走り戻って、マフスリがドゥラマンと不貞をしている現場をみた、ドゥラマンがマフスリからもらった指輪をしているのを見た、夫に告げた。

ドゥラマンが指輪をはめていたことは本当であった。それは彼女の父親の許可で、マフスリによって彼にあたえられたもので、マフスリの夫の長い不在の間に詩歌を暗唱したり、物語を語って彼女を慰めたというドゥラマンの善行への感謝の印であった。

しかし、彼の妻の物語を聞くや否やダトウはたいへん悩み、そして翌朝に彼は部下にマフスリを逮捕するよう命じて、そしてそれ以上の調査と裁判無しで彼女に死を宣告した。ダトウの部下たちはマワットのマフスリの家に行ったが、彼女は家の中にいないことを知った。マフスリは近くの木の下のぶらんこで彼女の赤ん坊に歌を歌っていた。部下たちはそこまで行って、彼女に会った。

彼女は、彼らがダトウから命令を受け、彼女の不貞の行為のためにドゥラマンと一緒に死を賜うために彼女を逮捕しにきたと告げられた。彼女はパダン・ハルスの処刑場に連れて来られるはずであった。

マフスリは驚いて、そして彼女は無実であると主張した。けれどもすべてが無駄であった。

娘が苦境におちいったという悲しい知らせを聞いた、彼女の父親パンダック・マヤは娘を救うために、彼の7頭の水牛のくびきを金にかえてその金を差し出して命ごいをしたが、しかしそれは全く無駄であった。

マフスリが処刑されるという知らせは、地域の村々に火のように広まった。そして多くのものが命令に抗議した。けれども何もかもダトウの決心を変えさせることはできなかった。

何百という人々が死刑執行を目撃するためにパダンハルス (Padang Hangus) に群がった。マフスリの最後の望みは最後に彼女の赤ん坊に会いたいということであったが、しかしそれはダトウに拒否された。

彼女はタマリンドの木 (pukuk asam jawa) にくくり付けられた。私も数年前にこの場所を訪問した時、この木を見せられた。それは古くてほぼ枯れかけていた。(処刑には) 2本の鋭いやりが使われた。マフスリの、肩の柔らかい部分の両側からその可憐な体に対してやりが突きたてられたが、鋭い穂先は彼女の皮膚や肉に突き刺さらなかった。何度も無駄な努力が試みられた後、マフスリは死刑執行人にもし本当に彼らが彼女に死刑を執行したいと望むのなら、彼女の家に彼女自身のやりがあって、そしてその武器だけが彼女を殺すことができると言った。

マフスリのやりを取って来るように命令がだされた。そして、やりが彼女の体に突き込まれるとすぐに、白い血が彼女の頭の上に傘で覆うようにほとばしり出るのが見られたのである。

これはこの物語の中で、多くの人、特に医師には信じられないであろうと思われる部分である。世界のどこにも白い血のある人間などいないからである。しかし、他のもっと年寄った人々によるまたちがった話によれば、それはマフスリの傷からほとばしり出ているようにみえたと言われる白い血ではなかったと言う。それによれば、死刑執行が実行されたすぐあとに、その地域全体が厚い霧で覆われたと言う。わたしが思うには、これは神の仕業であり、より分別のある合理的な考えである。

そして、ここからがこの物語の最も興味深い部分であるが、マフスリは息を引き取る前に、柔らかいそしてはっきりした声で、「ランカウィー島は7世代の間、繁栄せず、平和を楽しむこともできないであろう」とささやいたという。そして彼女の予言は本当になった。

ドゥラマンはこのひどい出来事を耳にして、プルリスに逃げ、その消息は二度と聞かれなかつ

た。

数年後にランカウィーはシャムによる侵略をうけ、蹂躪され、破壊された。ダトゥ・スリ・クルマ・ジャヤと彼の家族は皆、シャムによって殺された。冬民の多くが捕虜としてシャムに連れて行かれた。ダトゥの防御している陸軍が撤退する前に、最後の手段として彼らは島民の米や他の蓄えを燃やすという戦術をとった。もしあなたがパダン・マシラットをおとずれることがあるなら、あなたがたはまだ今日までも焼けただれた米の遺物を見いだすことができる。この地で発見される焼けた米の遺物が、本当に米であることは（今まで）確認されていた。どうやったらこのようなことが起こるのか、わたしには説明できないのではあるが。 [了]

この1971年に報告されたマフスリの物語は、1991年の公的ガイド版のそれよりはるかに長く、物語の前半には、マフスリの父の蓄財物語としての「燕巢」「樹脂」採取のエピソードなどが含まれており、マレー人であるマフスリの父とペナンへ商売にしているらしい中国人との関係など、むしろ悲劇のヒロインとしてのマフスリの運命以上に興味を引くエピソードがみられる。「無実を証明する白い血」などの超自然的な要素を多々ふくみながらも、いまだきわめて日常的で身近な物語として残っているという点で、この物語はまだ「伝説」化しきっていないと思わせる。むしろ、この20年間の間にマフスリの物語はドラマとしてその悲劇性を際立たせることで「伝説」として昇華された、ともいえる。

### 3. もう一つのマフスリ物語

このマフスリの物語にはもうひとつのバージョンがある。

1991年のガイド版にはわずかにふれられているのだが、マフスリの子孫が現在タイのプーケットに在住している。1989年、ランカウィーの Tunku Putra 中学校において「マフスリ物語セミナー (Majlis Penceritaan Kisah & Pameran)」が開かれ、その中で1988年12月にケダー歴史学会員・ケダー博物館員ら数名による調査団がタイ領プーケットを訪問し、現在カマラ村にいるマフスリの孫の妻 (1988年に80才)、曾孫 (1988年に83才) の一族に会ったことが報告された。彼らはマレー系ではあるが、マレー語は理解しない。

彼らによるマフスリの物語は以下のように語られる。

彼らによれば、100年以前昔に、ランカウィーからやってきた Wan Derus, または Wan Bagus とよばれる「外国の」ハンサムな男がいた。彼はマフスリの夫である。かれはナコンシータマラートとソンクラ（いずれも南タイの商業地方都市）の間の Nam Noi へ商売にきていて、弟（あるいは妹）からの手紙でマフスリが処刑されるということになった。その理由がマフスリの不貞であると書かれていたため、彼は大変に怒って、彼女をはやく処刑しようランカウィーに手紙をだした。

マフスリは捕えられ、処刑されることになったが、普通の槍では彼女を傷つけられず、彼女自身のクリス（短剣）を使うことになった。マフスリは処刑の前に7個の菓子の子供に与えたという。処刑された後のマフスリの木にくくりつけられた遺体の頭上には何羽もの鳥が飛び回り、さながら笠のようであった。

Wan Derus はシャムからランカウィーにもどった。弟の陰謀があきらかになり、Dato Pekerma Jaya は無実のマフスリを処刑したことを後悔した。

弟を捕えるように命令がだされたが、その前に Wan Darus は戦ってその弟を殺した。



その後、Wan Derus は息子の Wan Hakim を連れていっそうの船に乗り、シヤムに辿り着いた。彼はプーケットの Kamala 海岸に辿り着いて、そこの住人となった。

[42-43 : 1989, Majlis Penceritaan Kisah Mahsuri]

この話には白い血も7つの呪いも登場しない。ランカウィーでのマフスリ伝説と、その後の「発展型の伝説」の白眉は「マフスリの無実はその白い血で現された」という超自然的なイメージであるから、「白い血」の問題は別に考える必要があるだろう。

#### 4. 定番化する「伝説」の問題

実在の人間であるマフスリの身の上で起こったことがなんであったとしろ、これが Oral Tradition の形のままで残っている場合にさまざまなパターンが存在するのは当然のことであり、調査者は自分自身の噂さえ、他人の噂としてきかされることも起こる。

しかし、これらの Oral Tradition が一旦文字の上に起こされて記録され、さらに「観光」の名前のもとに改めて登場したとき、その「伝説」は異なった意味での固定化を始める。

Chaiwat Satha-Anand は南タイパタニのクルセ・モスクにまつわる伝説の一つが「モスクの建造者である改宗した中国人林道乾の妹が兄が故国（中国）を捨てたことを悲しんで縊死しモスクに呪いをかけた」という「伝説」として観光パンフレットに登場し、それを読んだ外国人（主に非ムスリム）にアピールしたことで、パタニの民族間のアイデンティティに新たな衝撃をあたえた例を報告している。

マフスリの伝説の場合も、もとの逸話を越えたところでの伝説の固定化——むしろこれこそが「伝説化」ともいえるが——が起こっており、その影響は、観光化への道をひたはしるランカウィーの社会そのものに及びつつある。

#### 参考文献

1. Lembaga Muzium Negeri Kedah Carulaman, 1989, *Majlis Penceritaan Kisah & Pameran Mahsuri*, Kedah.
2. Info Grafik Design, 1991, *Langkawi Guide*, Penang.
3. Datuk Wan Ibrahim bin Wan Solah, 1971, "Mahsuri: Satu tradisi" in *Kedah dari Segi Sejarah (Kedah in History)*. No.17
4. Crowther & Wheeler, 1994, *Lonely Planet Travel Survival Kit: Malaysia. Singapore & Brunei*.
5. Mike Gibby, 1994, *Island of Malaysia*, Singapore.
6. Chaiwat Satha-Anand, 1993, "Kruse: A Theatre for Renegotiating Muslim Identity". in *SOJOURN* No.8-1, ISEAS, Singapore

\* 本稿は平成7年度、文部省科学研究費による国際学術研究「タイ東北部におよび北部におけるオーラル・ヒストリーに基づく村落史の研究」、および、平成7年度、文部省科学研究費による国際学術研究「東南アジア史における『中央』と『地方』」による資料収集と調査に基づく成果の一部である。